



琉球大学

University of the Ryukyus

Title	第4回：今帰仁村立歴史文化センターと地元学校の連携について
Author(s)	-
Citation	地域にとって学校とは・学校にとって地域とは？ - 地域再生と教育再生の相互作用 - : 79-97
Issue Date	2012-02-23
URL	http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/25800
Rights	

琉球大学学術リポジトリ
University of the Ryukyus Repository



琉球大学学術リポジトリ
University of the Ryukyus Repository



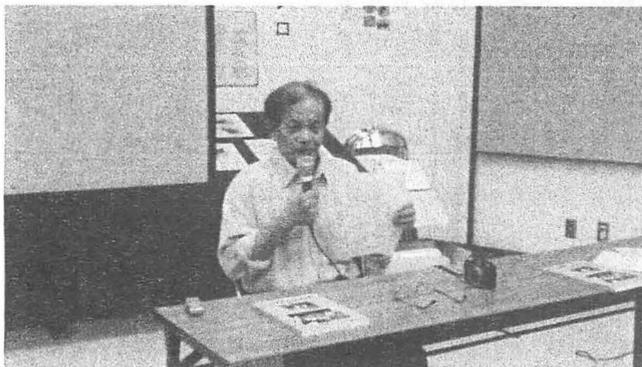
第4回：今帰仁村立歴史文化センターと地元学校の連携について

と き：平成23年9月24日（土）14：00～16：00

場 所：今帰仁村歴史文化センター

対象者：仲原 弘哲氏（今帰仁村歴史文化センター館長）

調査員：9名（島袋純、大宜見洋文、佐藤学、照屋勉、饒波正博、濱里正史、前城充、宮地順子、中村任子）



▲仲原氏



▲聴き取りの様子

（敬省略）

仲 原：学校と地域という大きなテーマをいただきました。私どもが当たり前に行っている事業をパワーポイント用いて紹介したいと思います。私たちが行っているのは、学校づくりというよりは人づくりなんです。今日はその話を中心にしようと思います。

私は約23年間、学校と関わっています。学校との関わりのスタートは、学校が月2回土曜日が休みに入った時、地域で何をするかということがありました。当初、図書館を開放したり、清掃ボランティアなどがありましたが、3年くらいでほとんどが消えました。その時、教育委員会（当時歴史資料館準備室）では「ムラ・シマ講座」を企画し、この講座は20年余り経った今でも続いています。

毎年4月に教職員の人事異動がありますが、教職員の辞令交付式の後、村内の紹介があります。その時、「総合的な学習でムラ・シマ講座を活用してください」とお願いしています。4月になると参加者（生徒）の募集をします。直接は学校に足を運び、募集要項を持って校長先生に声かけをします。初期から15年は小学校四年生を対象にやってきました。面白いこともあって何年も継続して受講する生徒も出てきます。

当初は小学校四年生に募集をかけており、村内の生徒全員にやってほしいとの希望がありましたが、200名も来てしまうと困ります。各学校から3～4名ずついれば十分なのです。教育委員会のほうから「なぜ全部受け入れてやらないのか？もったいない」と言われました。私たちのねらいからすると、各学校から3～4名来てくれたら総勢20～25名で十分です。各学校の3～4名の生徒たちが学校で話題になり、口コミで輪が広がり、当前のことが大事なのだと気づきます。するとクラス全体が一つにまとまっていきます。その様子は何度も見てきました。

現在、学校では総合的な学習の時間数が減らされています。時間数が減らされても、なくなっても歴史文化センターでは継続していく事業（学芸業務）だと位置付けています。

また、学校との結びつきが強いのは、校長先生方や管理職や初任者の研修を何年もやってきたということがあります。学校側にストレートに提言することができました。

（スライドショー「今泊」）スクリーンを見てください。今泊は今帰仁と親泊が合併したムラです。各地域には公民館（ムラヤー）があります。子どもたちはどこにでもあるものの大事さに気付いていないですね。「どこにでもあり、使われているものが大事です」と。私も持っている、あなたも持っている。もちろん古いもの、大きなものも大事だけど、実のところ私たちの生活のどこにでもあるものがより大事なんだ、という見せ方です。

各学^{がま}にあるのが公民館です。その中で誰が働いているのかと投げかけると、子どもたちは公民館とは何をしているところなのか気に留めます。「誰が働いていたの？」と声かけすると「だれそれのお母さんが書記です」と。そういう形で当たり前にあるものについて、言葉を投げかけて光らせていく。つまり字の宝探しをしていくのです。

（スライドショー「稲作」）2年前、学校と今泊の途中で稲作が行われていました。授業のとき、「学校に来るまで、気づいたことがありますか？そこに田んぼがありますよね」と問いかけると、10名余のうち3名くらいが田んぼを見ているのです。田んぼの主の方も、生徒たちが来るのを待っています。子どもたちに「田んぼについて聞いてきなさい」と行かせると、田んぼの持ち主が色々教えてくれます。

学校で稲作などの体験学習をしているニュースを見ますが、私は賛成しかねます。というのは、作物というのは心を込めて育てないと、満足いく収穫ができません。あるところで実験したことがあります。子どもたちは爪先立てて田んぼに入っています。田に入ると足で土を踏み込み、水が漏れないように塗り固める。また雑草を踏み込むこともやっているのです。子どもたちは初めてなので、田に入ることで精いっぱい、そのようなことは知りません。心がこもっていないのです。その時の米の収穫は十分ではありませんでした。作物は敏感に反応します。翌年は田の主は生徒たちを田に入れることを断っていました。

先生方をお願いしているのは、「家や学校で変わったことがあれば聞いてあげてください」ということです。例えば、桜の時期になると子どもたちがこちらにやってきます。「途中で何を見たのか？」と聞くと、「下のほうで桜が咲いていたよ」と。微妙な変化なのですが、耳を澄まし、自然の変化を敏感に感じ取れる感性を持っていることに気づかせてあげることも必要です。道を通りながら「この橋の名前は何か？ここではどんなことがあった？」などと質問していく。時には歴史の話をしていきます。昔今帰仁^{びん}城が滅ぼされた時、投げ捨てられた刀がどんぶらこどんぶらこ川を下って、たどり着いた場所がミジパイで、70、80年後に伊平屋の人が見つけました。千代金丸^{ちよがねまる}と言います。この刀は今どこにあるかということ、那覇市久茂地の那覇市歴史博物館にあります。このように現場に引っ掛けながら歴史を教えています。

(スライドショー「二つの神ハサギ」) ハサギは山原の歴史を見るときキーワードです。今泊に二つの神ハサギがあります。子どもたちに「なぜ今泊に2つあるのか?」と聞いて、歴史を紐解いていくのです。これは、今帰仁と親泊が合併して今泊になります。ところが、行政が一つになっても祭祀は頑固で一緒にならないという法則を見出すことができます。神ハサギが二つあることは、行政的に二つの村が合併したということが分かります。今帰仁村では、諸志や玉城も合併してできました。ところが、祭祀は、決して一体化していません。歴史の変わっていった部分をつないでいますが、実のところ変わらない、変化しにくい部分があります。それが祭祀なのです。祭祀を行っている順序(流れ)を見ていると300年前に行なっていたことが今でも継承されていて、当時の記録から祭祀の流れを復元することができます。

(スライドショー「ムラ・シマ」) 一つの共同体として伝統を持っているのがムラ・シマです。近世・明治まで、このムラ内で結婚し、このムラで一生を遂げるのが7割から8割でした。それが明治以降100年、150年経ってどう残っているのか。そういうムラ・シマの底を流れる、流れているものが何かということを見極めていきます。歴史学や民俗学の分野だけでムラ・シマを見ようとは思っていません。中には女性もいれば老人もいればハンディを持った方もいます。それをまとめて平均化してこうだとは言えないのです。個々一人ひとりを人間として見ていきたいですね。なぜそこに一人の人間として存在しているのかを見極めていこうと。ムラ・シマを構成している様々な要素を手がかりにして、子どもたちに自信を持たせることをやっています。これが歴史や民俗だけでなく様々な視点から見えていきます。もっと根っこの部分、深いところから見えていく必要があります。

ただ、今の子どもたちの世代に伝えていかなければならないのは、ひいおじいさん、ひいおばあさんの時代を知ること。今の時代と、未来の自分たちの時代を見出す手掛かりとなります。子どもたちには、自分たちの両親も経験していない、ひいおじいさん、ひいおばあさんたちの時代の見せていくことで、今の時代の姿をしっかりと見ていくこととなります。

(スライドショー「二つの公民館」) 先ほど公民館の話をしました。小学生の授業のときに、生徒たちが「公民館がなくなっていた!建物崩していたよ」と報告してきたことがありました。次回にまた報告があり、「そこは駐車場になっていたよ」と。生徒たちは、私たちが公民館がいつでき、いつ壊されたというのを視ていることを知っています。私は、「そういう報告があると助かるよ」と言いました。微妙な変化ですが、いつも気にしながら見ていく。公民館をキーワードにすると、どう変化していくのかということ子どもたちも気づきます。そこにいつ公民館を撤去したとの年月日の記録があれば、なおいいです。

(スライドショー「井戸」) 井戸についてです。今では井戸は使われていないところが多いです。使われていないのですが、埋めることはしません。安全のために蓋をしたり、網を取りつけたりしています。今泊では掘り抜きの井戸ができるのは明治になってからです。井戸ができる以前は何百年も親川の水を汲み、あるいは洗濯に行ったりしています。長年、親川の水に頼っていた生活があったのです。今でもハーウガミの行事を行っています。これは水に対す

る感謝です。子どもたちに教えたのは、生きていくために関わってきた欠かせないものへの感謝の気持ちです。井戸があるというのも大事なのですが、自分たちの先祖がその水で育ってきたのだという感謝を示す姿が、ハーウガミとして各地に残っているということです。

(スライドショー「鍛冶屋の跡」) 鍛冶屋の跡が残っています。鞴かまどが中に入っています。そこは火を使いますので、集落から離れた川辺にあります。周辺には珊瑚礁が置かれています。これは明治以降に、漆喰を作るために焼かれたサンゴです。そういった痕跡の一つひとつを拾い上げていきます。子どもたちには宝探しと言っています。

(スライドショー「マウイー馬場跡」) 馬場の跡は約 210 メートルあります。かつてはここが産業祭(原山勝負)や運動会の会場でした。大正になると学校に楕円形の運動場ができます。馬場のような直線で運動会をしていました。直線の走り競争や俵担ぎや騎馬合戦などが種目でした。馬場(大道)の中央付近には、公民館とコバテイシの大木があります。子どもたちに、「この大木(コバテイシ)は、このあたりで行なわれてきたことを長年見てきました。木は語りません。動きません。この木の下でどんなことがあったのか。馬競走や運動会や豊年祭など、語らずのはあなた方です。引き継いでいくことも」と言っています。コバテイシに何を語らずかは、あなた方が拾ってくる、それが宝探しです。

(スライドショー「獅子小屋」) 旧暦の8月10日、11日(妖日:ヨウカビ)に、獅子小屋から獅子を出します。集落の中に悪いものが入ってこないようにという、お祓いの役割を果たします。豊年祭のミチジュネーの先頭を走ります。そのような説明をしていくと、子どもたちは獅子小屋の前を通る度に思い出してくれるでしょう。

(スライドショー「今泊の浜」) また、1609年の旧暦3月27日は島津が攻めてきた日です。今泊の白浜しろはまから上陸したと見られます。薩摩の琉球侵攻は沖縄の歴史の中で大きな出来事でした。白浜は入口は狭いので大きな船は入ることは困難です。すると船は沖に停めて、小さな艇はしけで上陸してきたと思われまふ。その歴史的な日の頃、小学校六年生30名と体験学習をしたことがあります。ハンタ道からミーミングスクまで行き、そこで「薩摩の軍隊3000人がやってきた。僕らは30名しかいない。さて、皆どうする?」と言うと、何名かは「頑張って戦う」と言うんですね。「僕なら逃げなさい、と言うよ。向こうは鉄砲、こっちは竹の棒で、どうやって戦うんだい?」と。歴史で言われている話を、現場で体験をさせながら話しています。

また、この浜はシバンティーナと言って、悪いものを流す場所です。海神祭(ウンジャミ:ウイミ)という神行事があります。今帰仁城からシバンティーナの浜までいく場面があります。ムラ中の不浄のものをサンで払い、最後にこの浜で流します。海水で清めて戻っていく行事です。ここはそういう場所です。祭祀を見ていると、アブシバレーもそうですが、最後は海に悪いものを流す様子が各地で見られます。

また、今年の9月12日からは、職場体験として4名の中学生を預かりました。職場体験の生徒たちの目線は、学校で学ぶ受け身ではなく、職場で職員がどのような業務をしているのか。職員がどういう動いているのかを観察することを強調しています。「私たちの業務は、調べて、聞いて、伝えていく職業だから、皆さんが先生になったつもりで見てください」と子どもたちを指導します。子どもたちは職員の業務を見て回ります。そこで聞いたことを書きとめ、最後に報告するという形をとっています。

聞きっぱなしではありません。生徒が30名いたら30名同じ話をするのではなく、それぞれの目線での報告をしてもらいます。例えば、28名の生徒が「道具」について調べたら、最後には28名が違った道具の話をするような仕組みにしています。一度に28の道具について伝えることができるのです。物の名前だけでなく、この道具から色々な工夫や知恵を学んでいきます。その発見を友達に教えていくことまで指導します。聞いたものを書き記し、それを言葉で報告するという頭の構造を作っていきます。

こういうことを4年間（三～六年生）実施していると、ある程度スタイルができます。もちろん失敗もあります。村内の中学校の統合があった時、先生方の三分の二が異動し、仕上げの年度をすることなく終わったことがありました。それがきっかけで、地域学習は子どもたちに先生になってもらおうと切り替えました。自分たちのムラのことは子どもたちが先生なのだ、ということです。上手く説明できなくても、子どもたちはここにはこういうことがあると伝えられます。新しく赴任して来た先生方は子どもたちと一緒に現場に行き、学ぶのです。

歴史文化センターは、今婦仁のことだけではなく、与論、沖永良部島、徳之島など奄美も視野に入れていきます。というのは、奄美の島から修学旅行でやって来ます。与論島の子供たちならまず与論の話をし、そこから北山の話と結びつけていきます。先日、沖永良部島に行ったとき、公民館にいた子どもに「何年生？」と声をかけたら、「中学二年生」でした。「覚えてる？」と聞くと首をかしげています。帽子をとって見せたら「あ！思い出した！」と。（笑）そこは和泊町の畦布せふでしたが、「ここは君たちに教えてもらいたいな」ということで、何ヶ所かまわりました。そのようなつながりを作っていくこともねらいとしています。

子どもたちと現地で学習する時、多岐にわたって話をします。子どもたちはその中から2、3のことを拾ってくれたら十分だと思っています。そうしないと、レポートがみんな同じ答えになってしまいます。ここでは一人ひとり異なることを良いとしています。そうすると子どもたちは色々工夫し、自分の目線で物を見てきます。これに対して良い・悪いではなく、足りない部分はフォローしていきます。

20年余、そのようなことをやってきました。子どもたちとの信頼関係が強いものになっていきます。話をするたびに子どもたちに合ったテーマで話をしています。子どもたちの驚きの表情がいいです。

みなさんに差し上げた『第16期ムラ・シマ講座（平成20年度）』では、参加者がまとめたレポートが載っています。後ろに「私だけの碑文」というのがあります。2～3行書く子もいればびっしり書く子もいます。そこは書く時間は十分に与えていません。最初から、「聖徳太子になろう、聞いたもの見たものをまとめていこう、そういう頭にしていこう」と言っています。それに切り替えたのは、初期の頃、学校の先生方と一緒にフィールドでの学習をしたとき、

あるグループが、全部同じ答えをもってきたのです。「今、聞く時間」「はい今、書く時間。1、2、3、4、5」と5つくらい書かせています。そのグループの7名が全く同じ答えになっているのです。これではまずいということで異なる報告をよしと方向に切り替えたことがあります。報告をする場合、前の報告者とまったく同じ報告は禁止にしています。それで報告は早い物勝ち。3回目あたりから大人顔負けの発表をしてくれます。現場の先生方からすると、なかなかそうはいかないということは十分承知です。

最近、企画展示の準備が始まりました。子どもたちにも展示作業をさせました。白い壁に沖縄の地図を作らせました。最初作ったのは味があつていいかな、とも思ったのですが、「ダメだ!」と言って別の手法で再度作らせました。この作業をさせながら気づいたのは、他の地域のことはほとんど知らないということです。沖縄県の市町村名をカッターで切って貼らせたら、「名護どこ?」「国頭どこ?」と山原でさえ知らないのです。南部に行くとなおさらに知らない。そのこともあって、大学の講義の出だしは地図で場所の確認からスタートします。

全く知らないという苦い経験をさせながら、最後に子どもたちの「やったー!」という達成感の表情を見たら成功です。最初の作業はうろちよろよろちよろち4名が固まっています。2日目から、それぞれ動きが見えてきます。当初、訳が分からないけれど、展示全体の姿が見えた時「やったー!」との場面は、いつ見てもいいものです。これだけで終わりではなく、来月から展示会が始まります。自分たちが作ったものも展示されます。友達やお父さん、お母さんたちに自分たちが作ったものを見に行こうと誘うことができるのも大事なことです。そういう意味で、子どもたちの出番を作りながら、子どもたちに自信を持たせる、誇りを持たせるということをしています。しかし残念ながら、高校生からはパタッと切れてしまいます。

子どもたちの道具の学習では、28名なら28まで番号を付けて、クジで当たった番号の道具のスケッチをし、材料や用途、先人たちの知恵をまとめ、発表までしてもらいます。先ほど言いましたが、最初「おじい、おばあになろう」と投げかけます。子どもたちは「えー!?!」とげげんな顔をします。自分たちのおじいさん、おばあさん、ひいおじいさん、ひいおばあさんたちの生活は、電気や水道がありませんでした。あの頃はランプしかない。1つのランプはお母さんが台所で使い、もう1つはみんなが集まる場所に置きます。兄弟も7、8名いましたから、宿題もランプの下で頭を揃えてやっていました。「今はどうですか?」と聞くと「自分は机があります。蛍光灯がついています」「お父さんはテレビを見ていて、明るいです」と。「そうだね。あの頃はランプの下で、頭を揃えて勉強したので集中したのだね」と。「あの頃は水汲みや草刈など、家の手伝いがいっぱいありました。今はどうですか?」と聞くと、「部活で疲れて帰ってくる」など、今のほうが、勉強する時間があることに気づきます。

このやりとりは、子どもたちに相手の痛みを知ってもらいたいのです。テレビで戦争のことをやっていますが、それはテレビの世界であって自分たちとは関係ない世界なのです。「おじい、おばあになろう」のテーマには、殴ったら痛いということに気づいてほしいのです。例えば、その学習の時、学校を休んだ生徒がいます。休むことがダメではなく、グループ中に呑み込みの早い子がいます。その子たちにやってもらう。登校してきた時に渡してあげたらいい。自分だけ一番になろう、序列つけようではなくて、助けてあげようということが大事なのです。

小学校六年生は歴史の授業です。一学期のはじめに北山の歴史を時代区分し、8つのグループに分かれます。各時代2～3名で調べて行きます。夏休みなるとこちらの歴史文化センターにやって来ます。「私は北山王の時代を調べます」ということで来ます。北山王の名前は攀安知^{はんあんじ}。その頃は今帰仁城を頂点として、沖縄本島に3つのクニがあり、その1つが今帰仁城です。中国と貿易していたことなどを学びます。次は第一尚氏の監守制度のグループがやって来ます。夏休みの後半になると、「君は何時代か」「君は間切時代だろう」というふうに、時代区分を使つての会話が聞かれます。クラス28名を時代ごとに並べると、北山の歴史の700年が描けるのです。桜の時期になると、今帰仁城でパネルを持つての報告をします。子どもたちにとってはそれが楽しみなのです。こういう形で小学校三年生から六年生までやっていきます。単なる講話の植え付けではなく、体に歴史をしみ込ませていきます。社会に出たときに必要となってくる場面なんです。言葉の説明は最初からしません。「間切つて何ですか?」と聞いてきた時に初めて説明します。

今帰仁村には19の字があります。子どもたちに今帰仁村の航空写真を見せ、自分の家を探させます。自分の立っている場所、住んでいる場所を意識させるためです。人間というのは、自分の生活空間から外を見ていきます。外から客観的に見ることもあります。航空写真は上から見た自分もあることに気づいてもらうためです。

気づかれた方もいると思いますが、そこに沖縄本島をひっくり返した地図が展示されています。それには1つのねらいがあります。最近はあまりありませんが、当初は「これは間違っている、北が上だ!」と窓口に畳みかけてくる方がいました。シメシメです。以前、中国に行って上海の研究者と議論したことがあります。中国の歴史の長さや物資の膨大さでまくしたてられたことがあります。「ちょっと待って下さい。一言言わせて下さい」と。「もちろん万里の長城など皆さんが持っている歴史の長さや量の多さには敬服します。私の頭の中では、万里の長城より今帰仁城の城壁のほうがもっと大きいです」と話すと、相手はすぐに理解し、対等の議論をしたことがありました。量の多さも大事ですが、大事なものは、そこにあるものに、いかに情報を自分たちが共有化して持つて、発信していけるかということです。大学での講義で、ムラ・シマをテーマにしながら地域の文化が何かという議論をしています。大事なものは、自分たちが生活している空間の中で、文化になっていないものを自分たちで拾っていく作業が重要なことだと考えています。山原についても研究者たちとけっこう議論します。山原にどんな文化があつて歴史を持っているのかを、それぞれの分野で見つて拾つていこうとの作業が大事です。大事なことは、埋もれているものを自分たちでどんどんどん表に出していく。生活の中でうごめいているものを個性として認めていこうという発想です。

(スライドショー「今泊集落」)今日はみなさんに今泊の集落を歩いて見てもらったかと思いますが、今から50年前の風景とだいぶ違います。昭和30年代、この辺りは水田地帯でした。昭和38年頃大干ばつがあり、畑に切り替えます。その後田んぼに戻らず今に至っています。祭祀は稲作を中心としています。祭祀は旧暦のサイクルで行なわれます。しかし稲作、水田のある風景が消えると、やっていることと風景が分離してしまいます。その頃はまだ旧暦のサイクルが身についた方々が行っていました。

今泊にある、今帰仁城は立派ですが、実のところグスクを支えきたムラも重要です。グスクの中で行なわれる祭祀は、今帰仁ノロが管轄しています。今帰仁ノロが管轄する村は今帰仁村・親泊村・志慶真村の三ヶ村です。今帰仁城内に住んだ今帰仁按司や一族は首里から派遣された一族です。グスク内の祭祀は基本的に今帰仁・親泊・志慶真村の人々の祭祀です。今泊など地元の人たちが按司あしになっていくことはほとんどありません。尚家も伊是名・伊平屋からやって来て首里の王になります。中・南部のグスクの歴史を見ると、グスクとグスクの関係から始まっています。今帰仁城も外から来た人たちが住み、ところが祭祀は地元あなのムラの人たちが中心となります。今でも今泊の人たちがグスクの中での祭祀を行なっています。

先ほど、子どもたちに「おじい、おばあになつたつもりで学ぼう」と言いました。この写真は昭和30年頃です。まだ薪を頭にのせて運び、中には裸足で走り回っている子どもたちがいます。このあたりの風景です。これは昭和25年頃の写真です。この頃、教会ができて、外国人がやって来ると、子どもたちがぐっと集まってきて、チョコレートやガムをもらっていました。昭和27年から昭和38年の11年間、メルビン・ハッキンスさんがここで宣教師をされます。その時、字に車がありませんでしたので、ハッキンスさんの車が救急車代わりとなり活躍します。日曜日になると今泊、今帰仁、親泊の子どもたちが170名くらい教会にやって来ました。

この写真も見ていただけますが、私達が考えている山原の姿と別の答えが出てきます。昭和30年代まで、山の七分、八分まで段々畑でした。おじい、おばあが畑をしなくなったために今のほうが緑が多いのです。さきほど、稲作がなくなったので祭祀の実態と掛け離れたものになったと言いましたが、衰退してきたというのは、そういうこともあったということです。そういう中で田んぼは二期作をやりますけど、田植えから始まって黄金色に穂が垂れ下がって初めて収穫です。汗を流し、難儀し苦勞しての収穫です。「やったー！収穫できたぞ」という気持ちです。そのあと、一段落して豊年祭をするということでもあります。

また、これは子どもたちに環境の授業で手を挙げさせたことのある写真です。湧川小学校の全校生徒は20数名ですが、当然この写真（ミジパイで洗濯をしている写真）がいいと手を挙げるだろうと思っていたのですが、ほとんどの子がこの写真（コンクリートの水路の写真）がいいと手を挙げ、驚いたことがあります。もしかしたら子どもたちは、真っ直ぐな道路や、がっちり固められた護岸がいいという発想があるのかもしれない。国がやることは全部正しいということだろうかと思うんですね。これは非常に怖いことだと思います。「なんでこれが良くないのか？」と聞くと、「難儀だからさ」という答えでした。

これは隣の新里の川です。中学生がたまたま夏休みに勉強で来ていた時のことでした。「新里の川知っているかい？見に行つてごらん」と行かせました。すると「ゴミがいっぱいだった」と戻ってきました。「昔は、この写真のようにこの川で洗濯していたんだよ。君たちにこの川で洗濯ができるような環境を作してほしいというのが願いでだよ」と言いました。水が流れていたら、洗濯する場所、上は水を汲む場所、下は家畜を浴びせる場所と使い分けしていました。

周りに田んぼもありました。昔のように戻らないけれど、かつての風景をいつも頭にしっかり入れてもらいたいと思います。水が流れ、洗濯ができ、水田のある風景、その風景は環境の原点だと思います。

これは名護のマチです。昭和 23 年頃の写真です。現在の市民会館はまだ海の中です。宮里の御獄、そして市役所はちょうどこのあたり。名護のこのあたりはゼロメートル地帯です。今年の 3 月に東日本が地震と津波で被災しましたが、名護にあのくらいの津波がきたら、きっと同じような姿になります。その時、どうするか。「名護城^{なぐすく}に逃げなさい。名桜大学のある方向に逃げなさい。頭の隅に入れておきなさい」と話しています。過去に辿るということは自分たちの将来を見極めていくという作業でもあります。今の子どもたちは豊かな時代にいるけれど、そう意識していません。おじい、おばあの時代を知ること、それと歴史を辿ることは将来を見通していく力をつけていくことにつながるでしょう。このように写真を歴史史料として活用しています。読み込みのできる写真が貴重な史料となります。

多くの写真を残された米国の宣教師メルビン・ハッキンスさんには目的がありました。「なぜこんなに多くの写真が残されたのですか?」と質問したことがあります。その背景には色々な事情があったようで、その答えを伺うことはできませんでした。当時アメリカでは、兵隊に行くか宣教師になるかの 2 つの道があったようです。メルビン・ハッキンスさんは、宣教師の道を選んで沖縄に来たようです。ハッキンスさんの人柄が多く写真を残すことにつながっています。

メルビン・ハッキンスさんの写真はとても貴重です。歴史の話をするとき、子どもたち含め、昭和 30 年代の風景を紹介しながら話をしています。近代のマチを頭に描いて歴史を学んでいるとしたら、誤解を招いていることが多いのではと時々思うからです。そのために、こういう風景を最初に見せているのです。

子どもたちとの関わりは、最終的には人づくりだと思っています。学校の総合学習が減らされるのは残念です。総合学習の時間が減ってほしいというのは学校の先生方の本音かもしれません。学校現場は多忙で総合学習にエネルギーを使う余裕がないでしょう。やはり総合学習のできる教員をつくっていく必要があると思います。

今帰仁村は平成 4 年から総合学習を始めました。博物館の関係者で学校の総合学習をどうしようか、テーマになったことがあります。その時、多くの館が「総合学習は博物館がやる業務ではない」との意見が大半でした。今帰仁村（歴史文化センター）は積極的に導入すべきだと主張した記憶があります。博物館の生き残りも考えてのことでした。市町村の博物館で入館者数が多いのは今帰仁村歴史文化センターです。

すみません。しゃべりっぱなしですが、何かありましたらお願いします。

島 袋：どうもありがとうございました。

では、調査項目が 5 つありまして、それに沿った質問を私のほうからさせていただき、そのあとメンバーから自由に質問いただきたいと思います。

まず、調査項目1番と2番はだいぶお話いただいたので、3番からお聞きしたいのですが、学校との関わりの中で、具体的に学校側とどうカリキュラムづくり、授業づくりをしているのか。また、授業は1年に何コマなのか。例えば、三年生の授業、六年生の授業、中学生の職場体験の話などいくつか出てきて、たぶん一つひとつ異なると思います。この今帰仁村歴史文化センターの「ムラ・シマ講座」に小中学生を呼んでいる場合もありましたし、色々と複雑だったので、まず最初に取り掛かった四先生の総合学習についてお聞きしたいです。20年前は総合学習はなかったと思いますが、先生方とどう授業を作っていたのでしょうか？

仲原：学校が月に2回土曜日が休みになったので、そのときに各地域で、地域と学校で何をするか考えました。図書館を開放したり、ボランティアで清掃をしたりということでした。その中で、教育委員会(当時歴史史料館準備室)としては「ムラ・シマ講座」を考えました。当時はこの博物館はありませんでしたが、「ムラ・シマ講座」は月1回でも非常に人気のある講座でした。25名以下で、各学校から数名ずつ参加してもらいました。4月になると講座の募集要項を持って学校に説明に行きました。校長先生にお願いして理解を得ないとはいけません。こういう講座で、子どもを預かります、と。

当時は四年生対象でした。それには理由がありました。四年生は反応がいいということ。それと若い職員が指導できるということもありました。参加する生徒がいるかどうかは、担任の関心が多く左右されました。担任が関心を示さないと子どもたちは来ません。その頃は、一人も参加のない学校には電話をかけて、担任の先生に「先生のクラスからは一人も参加していませんが、先生ご自身が関心ないのですね？普通なら子どもたちは敏感に反応しますよ」と言って再募集をかけて、来てもらっていました。(笑)

学校全体ではできませんが、私はクラスから3、4名来てもらったら十分だと思っています。総合的学習に入った時には、そのベースがあったということです。人数の制限は、バス(29名乗)での移動がほとんどだからです。

それから、「ムラ・シマ講座」は、今帰仁村歴史文化センターの独立した講座で、20年間続いています。途中までは小学校四年生を対象にしてきたのですが、学校の管理職が変わると先生方の関心が薄らいできます。

兼次小学校では、「ムラ・シマ講座」とは別に、総合的学習を行ないました。校区にある今帰仁城が世界遺産に登録されたことや、校歌に今帰仁城が歌われていることなど、総合的学習にマッチしていました。当時の管理職が「目の前に世界遺産があるのに、子どもたちが何も分からなかったら困る」、校歌の歌詞にもあるのにとのことで、スタートしました。三年生が「わがムラ・シマ」、四年生は「今帰仁城に関わる民話」、五年生が「ムラ・シマの文化：芸能」、六年生は北山の歴史でスタートしました。この流れは上手くいきました。当初、テーマを決めていくのにモタモタしましたが、その流れは定着しました。

島袋：「ムラ・シマ講座」は、土曜日の午前中に四年生を対象に、学校の正規の授業とは別で始められたのですね。

今の四年生、五年生、六年生のそれぞれの授業は、学校の授業の時間内でやっているのですね。それは、兼次小学校が最初に、「ムラ・シマ講座」の一部のようなものを授業に入れ込んだという理解でいいのでしょうか？

仲原：別に始めています。総合的学習は、当初ボランティアをやるのだと施設に行きました。それを1年、2年とやっていくと3年目には「迷惑です」ということで断られたのです。そういったときに、兼次小学校は、自分の字のことを調べるということになりました。兼次小学校は、兼次、今泊、諸志、仲尾次、与那嶺の5つの字があります。子どもたちは自分の字ごとのグループに分かれて調べます。子どもたちは夏休みに歴史文化センターに来て、1年間何をするかということを決め、グループ分けをしたら、「館長、センターはいつ開いていますか？」と直接こちらに予約を入れるなどします。そこからスタートなのです。夏休みに3回くらい来て形をつくり、二学期に学校でまとめをし、12月に今帰仁城で発表をします。発表が子どもたちにとって一番やりたいことでもあるわけです。

島袋：ということは、普通、総合学習は学校の先生が一生懸命色んな施設やセンターに頼みながら、どうにか1年間プログラム作って、という形ですが、兼次小学校の場合は、四年生なり五年生なりを最初からこちらで預かって、それで1年間の学習プログラムを作って自分たちで何をやりたいかなども考えながら作って、12月に発表して、それが総合学習として出来上がるわけですね。

仲原：最初の1年は、1年間何をするかテーマを決めることで終わってしまったのですよ（生徒の様々なテーマがあり）。これは教えていいのかと考えているうちに前半は終わってしまい、それでは時間の無駄ということになり、具体的な活動に入ろうということになりました。三年生ではこれを学ぶ、四年生ではこれ、五年生ではこれ、六年生ではこれ。例えば六年生で学ぶ今帰仁城滅亡の話は四年生でも出てきます。それは「六年生の歴史でじっくり学びますよ」ということで、4年間連続性を持たせました。

先生方とは最初に話し合いを持ちます。しかし先ほども言ったように、先生方は忙しいです。以前、先生方と歴史を勉強したりしたことがありましたが、カリキュラムは学校で決めてもらいます。日程とテーマを決めていただいたら中身はこちらで考えます。先生方には「内容については任せてください」と言ってスタートしています。テーマと日程を決めてもらったら、歴史文化センターで行ないます。あるいは出前をしています。来週も8名ほど子どもたちがやってくるようになっていきます。それで活動テーマは決めてもらい、最後の二時間で発表まで行います。

先生方からすれば、時間を作れない、時間が合わないということが多いんです。それで日程さえ決めてもらえればいいです。「内容や進め方はお任せください」という形でさせてもらっています。

そういう意味では、今日お見せしているパワーポイントも一回きりです。次のメンバーの顔を見てまた作ります。こういうパワーポイントでの授業用は500本くらい持っています。臨機応変にそのテーマに合わせて作り変えています。ですから、学校がテーマを決めてくれれば、それに合わせて授業をしています。

島袋：講座は20～25名が適正な規模で、総合学習になると人数がかなり多いですよ。その対応はどのようにしていますか？

仲原：苦い経験は何回もしてきましたが、最初に大枠と全体像を見せながら、深めていく授業のほうがいいです。まずは今泊の全体像をみせます。その後に、①二つの公民館、②二つの神ハサギ

③馬場の跡、④県指定のコバテイシ、⑤鍛冶場跡、⑥師獅とヨウカビ、⑦福木のある集落、など宝物を探しましょう、と。一人が今泊の公民館、一人が馬場跡など一人ひとりが異なったことを調べます。それぞれが調べたことを、みんなに報告する。そのことを2、3回行います。するとクラス全員がクラスの人数のテーマを扱うこととなります。30名クラスであれば、30のテーマを自分たちのものにできます。最後には一人ひとりが30のテーマを自分のものにできる方式です。自分のテーマだけしか調べていないのだけど、最後は発表した皆の文章を覚えています。発表者の顔とテーマが一致するので思い出しています。

次の授業の時には、スケッチや文章が書かれたノートを手だちと交換して発表することも可能です。「君のノート、字が読めないな〜」という話も出ます。(笑)これは、頭の構造として、アナウンサーになろうということも言います。書いたものをそのまま読むということも大事です。中には何も見ずに話ことのできる生徒もいますが、それは何も残らないのです。ノートに残すことは、ノートを見ながら発表ができます。また、手だちにもノートを見せるとなると、真剣に丁寧にノートを書き、文章やスケッチを描きます。絵の描き方は学校での絵をかくのとは違います。手だちに見せてこの絵がどこなのか、何の図なのか特定できるようにします。そうしないと、子どもたちは一言しか書かないのです。ここでは禁句の「勉強になりました」と。そのため、場所の名前と何があったか具体的に文章や絵にしていきます。最後は、各字の項目が全部発表されて、その情報が全員の手に入っていく流れをつくっています(その後は担任の先生へバトンタッチ)。最後の成果の発表会へ歴史文化センターの職員は招待されます。

島 袋：総合学習を仲原館長にお任せするというのは、兼次小学校だけですか？他の今帰仁の小学校でもありますか？

仲 原：これは管理職の姿勢の持ち方によります。兼次小学校は10年くらいやってきて、去年管理職が変わった途端に子どもたちが来なくなりました。

島 袋：あ、そうですか！

仲 原：これは教育委員会から継続を申し出たことがあります、学校側の考えもありますので無理強いはしません。今度は、また別の学校に関心があり、進めている最中です。その学校の子どもたちがやってくるようになり、対応しています。離島の学校も夏にやりました。生徒たちがまとめた報告が届いています。

島 袋：なるほど。

今帰仁村の教育委員会として「今帰仁村の小学校は、総合学習をここの歴史文化センター中心にやる」というふうに決めて実施するという事はないですか？

仲 原：そんな強制はありません。私は人数が少なければ少ないほどいいのです。

島 袋：できるとすれば、1校くらいしかできないということですか？

仲 原：いえいえ。やろうと思えば十分できます。

最初は、先生方は子どもたちの送迎ができる人がいないからできない、などの理由で逃げたんです。それで私は大型の運転免許を取得しました。そういうことは言わせないようにしましたね。ムラ・シマ講座のため、毎回バスでの送迎で頼むというのも大変でした。私自身が大型免許を取るはめになりました。

運転をする時、注意が必要です。バスの中で言葉は一切発しません。それはもちろん交通安全のためでもあります。歴史文化センターの会場に入って初めて言葉を発します。子どもたちは「館長が話をするんだ」と分かると集中します。学校の総合的学習を見ていると、先生方が子ども目線に合わせすぎて幼稚化している様子を目にするからです。特に総合的学習になると。そうすると「子どもたちは遊びの時間」になってしまいます。もちろん息抜きの時間を説明の中で作ります。

当初、教育委員会の方から講座を持ってくれないかという話もありました。余裕がないのでできませんと断りました。「ムラ・シマ講座」に各学校から3名ずつ来てくれたら充分でした。

ある時、170名の中学生を対象（体育館）にやったことがありました。中に「ムラ・シマ講座」を受けた生徒がいました。その子たちは心得ているので、「講座受けたことある人、前に出てきて！」と前に出てきてもらいました。「ムラ・シマ講座」の雰囲気が一気に出来上がりました。校区から代表者を出してもらっての報告でした。校区が異なると交流がないので。

島 袋：今、教育委員会として協力しているのは、「ムラ・シマ講座」で各学校から3名ずつ出してもらおうということですか？これは20年以上一貫してやってもらっていることですか？

仲 原：これは消えかかっています。しかし、「ムラ・シマ講座」の面白さは一般の方々にも浸透しています。小学生の総合的学習は学校、あるいは歴史文化センターで行っています。ある意味で歴史文化センターに無理させないということかもしれません。お願いされたらいつでも対応します。

島 袋：中学校は職場体験の制度を活用して教えているということは分かりましたが、総合的学習を利用したプログラムはなかったのですか？

仲 原：中学校は先ほど言った170名を一気に教えたことは2、3回ありましたが、中学生になると部活に専念してしますので…。中学校の総合的学習がどうなっているかはわかりません。

大学生や社会人になっても関わります。大学になると人数が合計で150名の大人数なので、全員を現場に連れて行けません。それでプロジェクターを使って講義をします。来週から授業が始まりますが、伊是名のムラ・シマをテーマとして取り上げます。学生全員は連れて行けませんがプロジェクターでストーリーをつくって見せていきます。学生たちが実際に行ってみたいと思ったり、行くきっかけをつくっています。地域を視る視点や文化財などを画像で示すと、「これがテーマなんだ」「これが文化なんだ」との反応があります。学生たちのコメントを見たら、「フィールドワークをやってください！」との声が多いです。

来週の授業では学生一人ひとりの出身地を書いてもらいます。石垣や久米島などの出身が出てくると、そのムラ・シマの時にはそこを取り上げていきます。出身地の学生を引き込みながら話していきます。

島 袋：地域の方々との協力関係はいかがですか？例えば、仲原館長が行なっている授業の中に「今帰仁グスクを学ぶ会」の方々に参加するというようなことがありそうだな、という気がしたのですが。

また実際に、子どもたちを連れて地域の中に入って調査するとき、地域の協力が必要になってくると思います。例えば、地域の許可がないと入れない場所もあると思います。私も大学生を連れて地域に行くと、大学生はだいたい地域に迷惑をかけるので、大学生でさえ連れて行く

のが難しい状況があるんで、おそらく相当地域の方の了解というか、認められている、あるいは協力関係を結んでいくということが必要だと思います。仲原館長は地域との関係をどう構築されているのか、という点をお聞きしたいです。

それから、そのムラ、シマ、部落出身の子どもは分かるんですが、おそらく今帰仁もそうだと思うんですが沖縄は人口の流入が激しくて、そのムラの子どもではない新しく外から入ってきた子どもがいっぱいいると思います。得てしてそういう子のほうが、大人もそうなんですが、地域のことを勉強したいというような意欲があったり、今帰仁の人になるために積極的になるというようなことがあると思うのですが、いかがですか？

仲原：後ろの質問から答えます。村外から来た生徒のほうが文章が書けます。別の文化を持っているため、比較ができるので言葉が出てきます。「今帰仁グスクを学ぶ会」もそうですが、9割は外から来た方々です。地元の人たちが9割で、1割が外の人たちであってほしいですね。名護で講演しても8割は外からの本土の方々です。

沖縄の文化は20年で潰れるのではないかと思います。どうしても、沖縄の心までは教えきれないです。写真や資料の整理をしながら、色々なことを教えています。外から来た方々がそこで生活している方々より関心があります。それは文化の違いのギャップを言葉にして表現できるということかもしれません。本土から来た方々が、そこでリーダーになっていきます。

最初の質問ですが、今帰仁村で字誌を何件か関わっています。勉強会をしています。すると字の方々が参加します。「あの方に任せれば大丈夫だ」という信頼関係があります。調査に行く時は予約を入れません。地域の人でも私が来ると、「あ、館長、調査に来たのだな」と分かっています。そこで手軽に確認や調べることができます。

説明を字のお年寄りをお願いしていた時期がありますが、間もなく止めることになりました。高齢の方が多いので他界されることも耳に入ります。そうこともあって調査は自然体で行っています。また、子どもたちへの説明はお年寄りにとって非常にきついです。お年寄りから「話した日は寝れなかった。緊張したさ」との声が聞こえます。調査している時、たまたま通りかかったら、そこで「教えてください。昔はどうだったの？」と聞いています。そういう方々に出会えたらラッキーという感じです。

それから、仕事のほとんどをオープンにしています。ブログに出していますので、何をしているのかというのは、そこから分かります。もちろんオープンに出せない部分もあります。子どもたちから「館長、何で僕の名前出してくれない？」と言われることがあります。「全国から君たちのこと聞かれたら答えられないので、名前は伏せてあるよ」と言っています。(笑)

気になるのは、マスコミに出るから頑張っているとの発想があります。要するに地方版で、学校がよく何をしたということが出ます。それが一般の人たちの学校や博物館の頑張りだと思っている節があります。当たり前に行っているだけのことで、あまり気にすることはありません。

もう1つ大事なことは、よく「舞台づくり」だと言っています。村の方々や子どもたちを歴史の主人公にしていこうということです。この土地で生まれ生活し、一生を遂げるのが歴史の主人公なのだ、という考えに切り替えた時期があります。農業をしている方は農業で、花卉や園芸をしている方は園芸で、野菜作りは野菜作りで歴史に登場させてあげたい。それが歴史の

主人公にするために、それぞれの立場で歴史に登場させてあげたいというのが、この事業のねらいでした。ムラ・シマと言っていますが最終的には「人」です。

残っているのは特別展があります。歴史文化センターがオープンした平成7年に、ハンディを持ったメンバーたちの展示会をしたことがあります。これが成功しなければ自分がやっていることは辞めようと思った程の展示会でした。当初7、8名の展示会を企画していました。ところが最終的には13名全部員の展示会となりました。新聞記者が取材に来た時、握手の手を差し出した園生、新聞記者さんはサッと手を引っ込めたのです。記者さんに「それは、困ります」と。すぐに気づいて丁寧な記事を掲載してくれました。「あの園生は、この展示空間に来たら自分たちが主人公なのです」と。また、彼らは普段の生活で平穩の場を持っています。その場所にいる時は体調が思わしくない時です。その空間にいれば誰にも邪魔されない空間でもあります。大工に夢中になっている時、絵を描いている時、糸を紡いでいる時、それぞれの安堵できる空間を展示したのです。その安堵の空間に記者さんの手をひいて案内。お客さんに「自分の世界を見てちょうだい」と、特意になって紹介しています。その空間に入るとその方々が主人公なのです。とても感動的な展示会でした。そういう意味では、この博物館施設は小学生だけでなく、子どもから大人まで「人間学」を実践しています。

歴史文化センターへは、おじい、おばあちもよく来ます。30名やってくると道具や生活のコーナーが人気です。仲間と昔のことをいっばいしゃべって元気に帰っていきます。担当の職員に「今日は36名、今泊や周辺の老人会からやってきています。病院に行かず、歴史文化センターに来て、たくさんしゃべって元気よく帰りました」と伝えます。(笑)おじい、おばあちはここへ来て新しいことも学びますが、70歳を過ぎたら自分の人生を辿り「これで良かったなあ」と、満足した人生だったとのメッセージを送ります。展示会を見て帰り際、自分の旦那さんの写真があります。「夫^{おつと}を連れて帰りたいのだけどこっちがいいって、帰らんって。展示会終わったら写真ちょうだいね」と。そういう場面に出会うと博物館としての機能を果たしているとの実感があります。最近、大学で「人間」が付く学部などが見られます。今帰仁村歴史文化センターは、まさに「人間学」を実践しているのだとの自負があります。

先ほど人口の話をしました。昭和20年(戦前)と平成20年が重なってしかたがないです。戦前は南米や南洋などへの移民、あるいは満州の開拓などへの人の移動がありました。デフレの社会状態で人口の移動が沖縄に向っています。満州や南洋などに不況のはけ口が求めています。平成の人口の流れは沖縄に向っています。戦前の人口移動の結末は戦争でした。平成の人口移動の結末がそうならないように願います。

佐藤：私がこの歴史文化センターに初めて伺ったのが9年前で、他の民俗資料館や文化センターなど随分見て周りしましたが、やはりこちらが抜きん出て素晴らしいといつも思っていたんです。こちらが入館者数一番多いという話、また博物館の生き残りを考えていらっしゃるという話を伺って、やはりそうなんだということが分かりました。またこの機関が、子どもを含めた形で色んなことをなさっており、独自の強い存在になっているんだろうと思いました。

1つ伺いたいのは、こちらの民具や生活道具の収集などに関して、地域の方たちからどのような協力があつたのでしょうか？

仲原：ここは平成7年にオープンしたのですが、それまでは役場の教育委員会（公民館）で、十何畳かの小さい部屋で博物館づくりをスタートさせました。オープンにあたって展示資料をどうしようかということになりました。それまで京都や奈良、関東、北九州など各地の博物館を見て回りましたが、各地の博物館のような展示は今帰仁では到底できないことを自覚しました。もちろん今帰仁村に国指定の文化財、県指定の文化財はありますが、それは僅かです。

まだ歴史文化センターが完成しない前に、村のコミュニティセンターホールで19の字（ムラ・シマ）の展示会を行いました。何を展示するか企画書なしでした。19の字から展示できる物を何でも持ち寄ったんです。展示会一週間前に区長さん方に声をかけての資料収集しました。「見てください、あなたの字から、まだ一点も出ていません」と言うと、各字の競争が始まったわけです。（笑）それで展示物が大量に集まりました。

京都や奈良の博物館は一階から五階まで仏像の展示がされています。それは国宝級のもの。「あ、そのような展示は沖縄では無理！」と悟りました。

集められるものは全て展示会場に運び込むことにしました。当初、石臼を150集めることにしました。石臼を戴くことはなかなか難しいことが分かりました。それでも80は集めました。その時、集ったのは甕類でした。200近い数が集ったので、甕を雛段にして舞台いっぱいに表示することにしました。150基を舞台にバンツと並べました。それには村の方々には仰天でした。

先ほども言いましたが、どの家でも持っているものを束にすると文化になるとの発想の転換がありました。国指定、県指定など貴重な文化財の展示も大事だが、どの家でも使っていたものを展示することで、文化が見えてくることに気づきました。その時の展示会で収集したのが、現在展示してある物の大半です。ですから、村内の方々から提供いただいたのが今の展示物です。

佐藤：それでもう1つお伺いしたかったことがあります。こちらでずっと紀要（『なきじん研究』）を出されていますよね。私は何冊も読ませていただいて、ものすごく次元の高い研究論文だなと思っているのですが、それを村の歴史文化センターでずっと出されているというのは、これはすごいことだなと思っています。この紀要を村内で合意していく、あるいは盛り立てていくというのは、どのくらい安泰なのか、それとも戦っておられるのでしょうか？

島袋：お金も安く収まるようにしているとおっしゃっていたんですが、この紀要なり、いろいろと費用が掛かっているのではないのでしょうか？

仲原：「今帰仁村歴史資料館」から「今帰仁村歴史文化センター」に名称を切り替えました。国からの予算の捻出のためでした。まちづくり債や過疎債や県の特別振興資金などで建物を造りました。私たちがやろうとしている博物館活動の内容を見ると、どうも博物館の枠を超えた、もっと大きなことをやろうとしているとの意見が委員の先生方からありました。新しい文化の拠点にしようということで「歴史文化センター」という名前にしました。今でも各地の施設の名称が「コミュニティセンター」や「農業センター」という名称になっています。国の補助金の出所によるものです。ただ、〇〇公民館や〇〇文化センターというと、施設貸しのイメージがあって、この歴史文化センターもそれと同じように見られるということがありました。私にとって、それは問題ではありませんでした。新しい文化の拠点していこうとのねらいがありました。当初は、資料館、博物館ですよ。一言。

佐藤：学芸員やスタッフがおられて、紀要を作ることって大変じゃないですか。それをずっとされているというのはすごいですね。

島袋：そうですね。今婦仁村の行政と政治の中でそういった価値観を認めて、それに支出してもいいよという社会的合意がないとできないのではないかと思っているのですが、どうですか？

仲原：私は行政を知らない人間でした。あとで気づいたことですが、綱渡りをしながら歴史文化センターを作ってきたなと振り返っています。(笑) 助かったのは、大学で12年間教鞭を執っていたことが幸いしました。博物館づくりに、一目、二目置いて仕事をさせてくれたということです。それには非常に感謝しています。歴史文化センター(館)ができる前は、「乙羽岳から見える今婦仁村全体が博物館です」と言っていました。歴史文化センターでコンパクトに納めようという発想はありませんでした。偉い方々が来られると乙羽岳に案内して、「ここから見える世界が博物館です。19の字(ムラ・シマ)があり、一人ひとりの人間として住んでいます」と説明していました。「今婦仁村という空間は預金に例えると元金です。その空間から生まれている歴史文化は、利息に相当するものです。元金を壊すと利息は失ってしまいます」と。また、「この空間をゴルフ場にしようなどの計画は、元金を潰すことになります」と言っていました。そのような視点での博物館づくりでした。今婦仁がなぜ博物館づくりができたのかというと、私が素人だったということと、最初から「ムラ・シマ」を意識していたということだと思います。

また、機関紙づくりですが、すごいエネルギーを使います。あの頃のタイムカードを見たらびっくりします。あのような冊子を見ると、自分で頑張っていると言わなくても、頑張りの様子が分かります。当初『すくみち』という機関紙を発行していました。33号で役目は終わりました。その後は『なきじん研究』に移行しています。村の方々から伺ったり、調査したものを発刊しつづけました。非常に人気のある冊子でした。話を伺った方に届けると、翌日には一生懸命赤ペンをいっぱい入れて持参してきました。「ここは悪口を言ったので消してくれないか？」

「そこは言い間違っているので訂正」など、関わってくれました。「はい、これは本にする時には直します」というふうには本作りをしました。最初はみみっちく誤字を直していたんですが、次第にそれは振り払われてきました。時々私は書いたものをちぐはぐに構成していたりしますが、その方々は行間をしっかりと読んでくるんです。「きっとこの間には何か意味があるんだよね？」と逆に解釈してくれたり、最初は批判的なこともありましたが、それらの方々の巻き込みながら発表の場として本にしてきました。

佐藤：他のところを悪く言うのは良くないというのは百も承知で言うんですが、名護博物館は70年代、80年代に、建物ができる前に市民の方たちに呼びかけて市民参加で収蔵品をいっぱい集めたんですね。元の形はとても素晴らしい博物館なんですよ。ところが、後のほうであまり力を入れてこなかったのではないかと見えるようになって、それに比べてこの歴史文化センターはずっと継続してやってこられていてすごいなと思っています。

仲原：名護博物館は、初期の頃少し関わっていました。名護博物館は、市民が行ったら1回きりといった印象をもっています。そこは今婦仁の博物館づくりの参考にしました。展示は量の多さで展示する時と、展示の後ろに資料の多さと、調査・研究の深さがあります。物があるからの展示というより、調査・研究の成果を展示していく手法をとっています。山原(北山)の文化な

んだらうか。山原の宝物を一つひとつ引き上げていくと、そこに「何か輝くものがある」との夢を持たせる展示をしています。「あ、そうか」で終わるような展示ではまずいと思っています。それと展示や研究のまとめは七分、八分で押さえています。後の二分、三分は次のメンバーが深め、そして厚みをつけて行ってほしいとの希望があります。

また、歴史文化センターに来られる方々の7割、8割は本土からの方です。その方々への展示を考える必要があります。

島 袋：学校の先生方は基本的には決まりきった授業の内容で決まったことを伝える、教え込むことが自分の役割だと思っている方が多いと思います。ところが課題を発見する力がとても重要で、ある程度課題を設定してあげるとしても、その中でさらに重要な課題は何なのか自分で考えないといけないし、それから探求する作業がとても必要で、しかもこれは答えがない、どこから答えを教わるわけではなく自分で発見しなければいけません。そのこと自体を学校の先生方がやってきていない。その能力がない。小学校・中学校の先生方がそういった能力がないのに、こういう授業やりたくて相談しに行っても分からない、理解してもらえない。ということは、一番最初に重要なのは、学校の先生方にもその能力が必要なんだということをどこかで教えて協力できる体制にしてもらわない限り、今の沖縄の学対主導の授業の仕方だと沖縄の学校は滅亡に向かっているんじゃないかという気がして仕方ないんですが、学校の先生方にこういった課題発見、課題探求力を身につけることが重要でそういった授業を作る必要があるので一緒にやっていきましょうということで、どうやったら取り付くシマがあるのか。何かしら働きかけて学校の先生方が変わってくれたなどのエピソードはないですか？

仲 原：教員という仕事は人の成長がよく見えると思います。子どもたちをまとめていく学級経営は経験で見事だと思います。しかし、本人も成長し続けているかという、必ずしもそうでないように思います。

「ムラ・シマ講座」に参加した先生が、クラスの生徒を引率してムラ・シマの案内や説明されています。何名かいます。また、先生が異動してきたばかりの時、村内のレクチャーをします。歴史文化センターを活用してくださる先生方は、歴史文化センターの指導方法に学び、取り入れています。できそうだと。ところが、10月から12月になると、歴史文化センターにお願いにきます。多忙でお手上げではないかという気がしています。それでもこちらに投げかけてくれるだけでも生徒たちにとってはラッキーだと思います。

島 袋：みんな同じような悩みを持っていますね。（笑）

他にどなたか質問ありますか？

濱 里：非常に素晴らしい取り組みだなと思いながら聞いておりました。歴史文化センターがこういう形で続いていくためには、今婦仁村民全体が「この歴史文化センターは自分たちのもので、自分たちの自慢の一つだ」という理解や浸透があるんだと思います。

もう1つは、この手の取り組みは仲原館長だったからできたのかな、と思ったりするのですが、これを引き継いでいくための後継者の育成はどのように行なっていて、今どのような状況ですか？

仲 原：私が去年退職したときは、首長の方から「仲原を逃がさない！」ということで、囑託という形で残ることになりました。3年間で人づくりをしてもらいたいということで残っています。

私が大学で授業があるときには、職員2人を連れて授業に参加してもらっています。また、調査の一部を報告してもらっています。そういうメンバーたちにバトンタッチしていきたいなと思っています。テキストがないので大変だろうと思いますが、私の側にいれば分かるので見て学んでほしいと思っています。

私はあと1年は残ると言っていますので、その間にメンバーたちにバトンタッチしていきたいです。今婦仁の調査・研究や教育は、今婦仁を教えているようで、実のところ沖縄、日本、アジアを網羅した視野の広がりのある調査・研究や教育です。大学で教えていると学生たちから「なぜ歴史を学ばないといけないのか。受験に関係ない、就職に関係ない」という声が聞こえてきます。3回目あたりから、沖縄の歴史や文化を学ぶ意義が理解されます。社会人の学生もいます。社会を体験された方々は目からウロコが落ちていく、「そういうことだったのか！」のレポートが帰ってきます。

大宜見：20年取り組みを続けてきて、関わった子どもたちが30代、40代になっていると思うんですが、地域を支える人材として育てている手応えというのはありますか？

仲原：十分あります。例えば、「ムラ・シマ講座」の一期生たちは28歳になっています。すでに社会に出ています。市役所や役場や教員などで活躍しています。また、歴史文化センターで学芸員の実習をしています。二週間、あるいは一週間の実習です。あるいは大学院の学生たちがやってきました。それと歴史文化センターと関わっていったメンバーが地域で活躍しています。地域を知ることがいかに大切かを実感しているように見えます。歴史文化センターの役割として、関わったメンバーがどう成長していくのか、社会人への過程を見ていける立場は冥利につきます。

島袋：今日は長い時間、本当にありがとうございました。